AIC Color 81 Berlin の概要[†]

専門会員 福田 保*

1. AIC について

1957年に、フランスの色彩情報センター (French Centre d'Information de la Couleur (CIC)) は、国際的な色彩会議を毎年開催することを計画し、まずベルギーの色彩情報センター (Centre d'Information de la Couleur Belgique) の協力を得て、1959年に開かれた CIE 第14回ブラッセル大会の直後に国際色彩会議が開かれた。その後はフランスと隣国とで1年おきに開催されることになり、1961年には Düsseldorf (西独) (村上静男氏出席)、1963年には Florence-Padova (伊) で開催された。同年には CIE 第15回ウィーン大会が開催され、これに参加する各国代表が集まり、ヨーロッパだけでなく全世界を含む国際色彩会議を組織する計画が進められ、CIE 大会の後 Strasbourg (森礼於博士出席) で組織化が討議され、さらに1965年の Lucerne 会議 (スイス) (故稲村耕雄博士出席) で、さらに検討された。

1967年に CIE 第16回ワシントン大会が開催され、その会期中に、故ジャッド博士の招集によって各国の代表者が集まり、世界的な国色彩学会が発足し、Association Internationale de la Couleur と命名し、略称をAICと呼ぶこととなった。筆者はこの CIE 大会に参加したので、当時の色彩科学協会の代表として故野中守博士とともに、この歴史的な会議に出席し、色彩科学協会が AIC に参加

する意志を表明し、筆者が加盟のサインをした。これは1967年6月21日の午後のことであった。

この AIC 発足以後定期的に会議が開催された。今日までの定期的な会議の開催状況は次のとおりである。

- 1969年 Stockholm (Color 69)
 1971年 Driebergen (Color Metrics)
 (CIE 17, バルセロナ大会)
 1973年 York (Color 73)
 1975年 London (CIE 18, ロンドン大会)
 1977年 Troy (Color 77)
 1979年 東京 (Color Appearance)
 (CIE 19, 京都大会)

1981年 Berlin (Color 81)

その他にも随時加盟国学会との共催で、特別なテーマによる討論会が開催されている。

なお、今日までの役員の変遷は表1のとおりであり、日本からは印東太郎教授が、第3代会長に就任された。また現在の加盟国は表2の17か国であり、その他にオブザーバーとして、デンマーク、パナマ、南アフリカ、トルコの4か国の人々が参加している。1国1団体だけが加盟することになっていて、日本では現在日本色彩学会がメンバーとなり、同学会では昨年5月の総会で会則を改正し、AIC のメンバーであることを宣言した。

回を重ねるにつれて、日本からの AIC 大会への出席者

表1 AIC の 歴 代 役 員

	1967~1969	1970~1973	1974~1977	1978~1981	1982~1985
会 長	W. D. Wright (UK)	Y. LeGrand (France)	T. Indow (Japan)	C. J. Bartleson (USA)	R. W. G. Hunt (UK)
副 会 長	G. Tonquist (Sweden)	C. J. Bartleson (USA)	R. W. G. Hunt (UK)	J. Schanda (Hungary)	H. Terstiege (Germany, F. R.)
会計庶務 理 事	E. Ganz (Switzerland)	E. Ganz (Switzerland)	A. Brockes (Germany, F. R.)	A. Brockes (Germany, F. R.)	J. J. Vos (Netherlands)
理 事	—	W. D. Wright (UK)	Y. LeGrand (France)	T. Indow (Japan)	A. Hård (Sweden)
"	—	G. Tonquist (Sweden)	C. J. Bartleson (USA)	R. W. G. Hunt (UK)	P. K. Kaiser (Canada)
"	—	T. Indow (Japan)	E. Ganz (Switzerland)	L. Plaza (Spain)	F. Parra (France)
"	—	M. Richter (Germany, F. R.)	P. L. Walraven (Netherlands)	A. R. Robertson (Canada)	U. Willumsen (Norway)

数は増加しているが、今回のベルリン大会には、事務局の発表によると、25か国 359名の参加者のうち日本からは32名が参加し、その数はドイツ、アメリカに次ぐ第3番目で

[†] Review of AIC Color 81 Berlin

* 大妻女子大学家政学部

Tamotsu Fukuda

表 2 AIC 加盟国と各団体

アルゼンチン	Grupo Argentino del Color
ベルギー	Centre d'Information de la Couleur Belgique
西ドイツ	Deutscher Verband Farbe
イギリス	The Colour Group (Great Britain)
フランス	Centre francais de la couleur
インド	Colour Group of India
イタリア	Associazione Ottica Italiana
日本	Color Science Association of Japan
カナダ	Canadian Society for Color
ノルウェー	Norsk Farveforum
オランダ	Nederlandse Vereniging voor Kleurenstudie
オーストリア	Arbeitskreis Farbe der ÖVE-ÖLAV
スウェーデン	Svenska Färggruppern
スイス	Schweiz. Vereinigung für die farbe "Pro Colore"
スペイン	Comite Español de Color
ハンガリー	Hungarian National Colour Committee
アメリカ	Inter-Society Color Council

あった。

2. ベルリン大会

AIC第4回大会は、“Color 81”と称して1981年9月21日ベルリン工業大学において開会した。以下にその概要を報告する。

(1) 登録および開会式

開会式に先立って、その前夜7時から Hotel Gehrhuis で始められた。ここは西ベルリンの繁華街から西方へ少し離れた静かな高級住宅街の中にあり、小規模であるがたいへん格式の高い立派なホテルであった。ここで登録を済ませ、8時ごろから歓迎会が持たれ、参会者相互の再会を喜び合っ、おいしいビールやワインのグラスを傾け合った。

翌朝9時より開会式が開かれ、テルスティーゲ博士の司会によって、まずベルリン工大副学長フリッケ博士の歓迎の辞およびバートルソン会長の開会の辞があり、30分で終わった。

(2) 会場および会の運営

会場となったベルリン工大は、西ベルリン市の中心部にあり、同市の鉄道の玄関口にあたるツォー駅から歩いて15分ぐらいの所で、地下鉄のエルンストロイター広場駅の東側のビスマルク通りという広い道路をはさんで、南北に広大な敷地を占め、たくさんの建物の並んだドイツでも最大の大学の一つである。

会場はビスマルク通りの南に面した建物の一隅に設けられ、大小2会場（A会場一大会場でH104教室、B会場一小会場でH1059教室）に分かれて講演が行われた。A会場の前はかなり広いスペースがあり、器機展示、書籍展示も行われ、一隅に事務局が設けられ、コーヒショップもあり、参会者の交歓の場でもあった。事務局にはテルスティーゲ博士と3名ぐらいの若いスタッフが、絶えず笑顔でわれわれに應對してくれていた。A会場は大きな階段教室で、2階分あり、後方出口は2階になっている。この2階にも広場があり、器機展示およびポスター発表会場となっていた。一方、B会場は2階の少し離れた小教室で、ここ

も階段教室であった。

一般講演はA会場で行われ、専門講演はAB両会場で平行して行われた。ここで一般講演はいわゆる招待講演で、専門講演には各分野ごとの研究発表のほか、今回からセミナー（司会者が主題講演を行い、数名の講演者が補足的に意見を述べ、その後聴衆との間に質疑応答が行われる）、パネル討論会（数名のパネラーが意見を述べ、聴衆との間で討論される）、ポスター発表（発表者には1コマのスペースが与えられ、ポスター・写真・研究材料などを展示し随時説明を行う）がはじめて行われた。9月22日の色順応のセミナーでは、納谷博士の非線形モデルの説明があった。

大会全般の運営は、テルスティーゲ教授の指揮の下にたいへん整然と行われ、その準備の良さに敬服した。

昼の休憩時間は約1時間半であったが、同大学の食堂の2階の職員食堂で昼食をとった。ドイツ料理は筆者はあまり美味とは思わなかったが、昼食時にもビールを飲み、乾燥したのを潤した。

(3) 日程

大会の日程は次のとおりであった。

9月20日（日）

19:00~21:00 ゲールスホテルでの登録・歓迎会

9月21日（月）

9:00~9:30 開会式

歓迎の辞：ベルリン工大副学長フリッケ教授

開会の辞：AIC会長バートルソン博士（米）

9:30~12:30 一般講演

開会講演：「観念と現実としての色彩」フリーリング博士（独）

Judd-AIC 賞授与：リヒター教授へ

講演：「測色学の発展」リヒター教授（独）

講演：「CIE 標準観測者の50年」ライト教授（英）

14:00~17:30 専門講演

A会場 測色応用（4件）

セミナー「明るさと輝度」

B会場 色覚1（3件）、心理およびデザイン（8件）

19:00~21:00 歓迎会（会場エジプト博物館）

9月22日（火）

9:00~9:45 一般講演

講演：「色覚の機構」アブラモフ教授（米）

10:00~12:30 専門講演

A会場 セミナー「色順応」

ポスター発表（21件）、辻村ら（日本電色）、山中ら（電総研）、柳瀬ら（色研）の発表があった。

14:00~17:30 専門講演

A会場 色覚2（3件）

セミナー「色覚モデル」

B会場 色順応（3件）、森ら（東芝）の発表があった。

演色（5件）、竹村ら（富士フイルム）の発

表があった。

- 9月23日(水)
- 9:00~11:00 一般講演
- 講演:「カラーオーダーシステム」ヴィセッキ博士(カナダ)
- 講演:「芸術における色彩」ボック博士(独)
- 11:15~12:30 専門講演
- A会場 色差(4件), 印東(カ大)の発表があった。
- B会場 パネル討論会「白色度」
- 13:30~21:30 ハーフエル湖遊覧

図1 ハーフエル湖遊覧船上で歓談する
リヒター博士とライト博士夫妻

- 9月24日(木)
- 9:00~9:45 一般講演
- 講演:「色差」ロバートソン博士(カナダ)
- 10:15~12:30 専門講演
- A会場 色覚異常(2件), その他(5件)
ポスター発表(23件), 金子(筑波大), 淵田ら(東芝), 児玉ら(色研), 中村(阪大), 小林ら(カラーデザイン研)らの発表があった。
- 14:00~16:00 専門講演
- A会場 測色(6件), 太田(富士フィルム), 納谷ら(大電通大)の発表があった。
- B会場 セミナー「色再現」
- 16:00~17:30 AIC 総会
- 19:00~ 晩餐会(ホテル・シュバイツアーホフにおいて)
- 9月25日(金)
- 9:00~9:45 一般講演
- 講演:「色彩測定」テルスティーゲ博士(独)
- 10:15~12:30 専門講演
- A会場 色彩測定(2件)
パネル討論会「工業上の色の許容差」
- B会場 測色(7件), 秋田ら(京織大)の発表があった。
- 14:00~14:45 閉会式
- 閉会の辞 AIC 会長バートルソン博士
その他に次のようなプログラムがあった。
- 西ベルリン市内観光(21日午後)
- エジプト博物館および古代博物館見学(22日午後)
- 東ベルリン市内観光(22日午後)

陶器工場見学(24日午前)

国立美術館見学(25日午前)

ダーレム博物館見学(25日午前)

ポツダムへの一日旅行(26日)

(4) 参加者

本大会への参加者の数は25か国 359名(うち同伴者57名)で、これまでの大会と比べて必ずしも多くはなかったが、そのうちドイツが145名, アメリカ49名, 日本32名で、多いほうから3番目の参加者数であった。日本の経済事情が良くなったとはいえ、回を重ねるごとに、日本の色彩関係者の目が広く海外に向けられていくことは、喜びにたえない。なおその他の各国の出席者数は次のとおりであった。英31, オランダ24, スイス19, スウェーデン10, カナダ7, フランス6, オーストリア5, イスラエル, ノルウェー各4, オーストラリア, ベルギー各3, アルゼンチン, デンマーク, 南アフリカ, トルコ各2, ブルガリア, 中国, ソ連, フィンランド, インド, イタリア, ポーランド, スペイン, 香港, ハンガリー各1であった。

3. AIC における研究活動

AIC では大会その他の会議のほかに、いくつかの研究グループをもって、国際的な協力のもとに研究成果をまとめようとしている。その一つはカラーオーダーシステム研究グループで、ヴィセッキ博士を中心としてまとめられているが、その成果がこのたびのベルリン大会中(9月23日)に同博士によって報告された。今後はこのテーマで、1983年にストックホルムで会合が持たれることになっている。日本の代表は納谷博士である。

次に色彩教育研究グループの活動で、ハンガリーのシヤンダ博士を中心として、学校における色彩教育の現状調査が進められている。日本の代表は宮崎教授(福岡教育大)で、その内容は随時日本色彩学会ニュースに報告されている。今回のベルリン大会の閉会直前の9月20日にこの研究グループの会合が持たれ、川上博士が出席された。今後も引き続き調査が続行されるものと思われる。

第三はカラーダイナミックス研究グループである。これはハンガリーのAICメンバーから提案され、ブタペストにおいて、今年の6月8~10日に会合が持たれることになっている。これはデザイン関係者と科学者とのカラーダイナミックスに関する用語の統一、色彩・人間・環境の間の関係の解明、それらの結果の応用、デザイナーと科学者との交流などを目的とするものである。日本では湊教授(千葉大)が代表となっていて、日本色彩学会において研究会が持たれている。

4. CIE と AIC の関係

AIC は1においても述べたように、ヨーロッパの色彩グループとCIEの色彩関係学者との交流によって誕生したといつて過言でない。したがってCIE大会の開かれる前後に、その開催地の近くで必ずAICの中間大会が開催

される。また AIC の大会が開催されるときには、その前後に CIE の色彩に関係の深い TC が開催されるといったぐあいである。このたびも、

9月16~17日 TC-3.2 演色 (BAM において)

9月18~19日 TC-1.3 測色 (BAM において)

9月26日 TC-2.3 照明材料 (TU において)

などの TC が開催された。また、AIC ベルリン大会に引き続いて、ロンドンで「CIE 1931~1981 色彩50年記念祝賀会」が催された。

以上のように、AIC では CIE の色彩関係における合意事項を一般の研究者に周知させるとともに、CIE では取り扱うことが困難なテーマについて討議することを会議の

目的としており、両者の共存によって今後ますます色彩科学の発展が促進されることとなろうと思われる。

5. おわりに

今回は、1985年に第5回大会がモナコで開催されることになっていて、そのホスト国はフランスである。また次回の CIE 大会は、ポーランドのワルシャワで開催される予定であるので、AIC の中間大会が近辺で開催されることになる。われわれは2年後の CIE で会いましょうと、それぞれ帰国の途についた。日本の現勢から考えて、近い将来 AIC 大会が開催されることを期待している。

(受付1982年2月17日)

新製品紹介

伝送方式と制御機能別に4種類 省電力照明制御システム《アイマクルス》

岩崎電気株式会社では、電力線搬送方式と信号線方式の採用など、用途、運用方法および負荷設備の状態に見合った形で機種選定が可能な、省電力照明制御システム《アイマクルス》4システムを開発した。これにより、すでに商品化している昼光センサ制御システム《アイライティングセーブ》と合わせて、5システムをラインアップしたことになる。

今回シリーズ化したのは、伝送方式と制御機能別に「Cシステム」「Wシステム」「Eシステム」「CONT 16」の4システムである。これらは(1)施設の運用方法に見合った機能をもつ(2)既設改修を含め、導入が容易(3)操作が容易といったユーザーズに対応することが配慮されている。特に、システムの中核となるコントロール盤は、制御機能、伝送方式別に合計13機種用意されており、副操作盤、監視盤、遠隔(壁)スイッチおよび動力用端末器などのオプションパーツの追加も容易にし、動力設備などの応用監視制御も可能としている。

《Cシステム》

電力線搬送方式で、10 km 以内の長距離伝送が可能であり、必要に応じて変圧器を飛び越えて伝送できる。このため、既設の改修や、広域に分散している負荷の集中監視制御に最適である。

《Wシステム》

信号線2芯を用い、DC±5Vで伝送する信号線方式で、1.5 km 以内の中距離伝送が可能である。これは比較的負荷が集中している施設向けである。

《Eシステム》

制御回路数(N)に応じて(N+1)本の制御線でコントロール盤内の出力接点と電磁開閉器とを結ぶ方式で、分電盤1回路ごとの大まかな制御や大容量負荷の開閉に適する。

MACLS 811 コントロール盤

Cシステム専用4チャンネル端末器

アイマクルスの構成

《CONT 16》

操作性の簡易化を主眼に開発したもので、時間制御を行わない体育館、講堂、多目的ホールなどのパターン制御を手動操作するシステムである。伝送方式は電力線搬送方式で0.5 km 以内の近距離伝送が可能であるが、Cシステムとの連動および同一電路内の並列運転が可能のように、信号波の種類をかえてある。

(問い合わせ先 岩崎電気株式会社)
東京都港区芝3-12-4 電話03(452)5351